

千葉県における千年村の地形立地と水系との関係

○梶尾 智美*
高橋 大樹**
桃井 佳奈子***
木下 剛****

1. 研究背景・目的

千年村とは、千年を超えて集落が存続してきた可能性のある地域のことと、地形・地質といった集落の基盤としての「環境」と、それに適応する集落の「構造」、またそこに展開される「コミュニティ」を三位一体のものとして捉え、総合的に地域を評価することを意図した概念である¹⁾。一般に、「集落の立地には、居住者の生産基盤によっても異なるが、基本的には日当りがよく、飲料水が得やすく、自然災害が起こりにくく、外的の侵入に対して安全な場所が選ばれる。」²⁾とされており、集落の立地はその環境条件に大きく左右されるといえる。そこで、本研究は、集落の生存・生産基盤となる地形立地と水系に着目し、両者の関係を、千年村を対象に検証することを目的とした。

2. 研究方法

1) 千年村の抽出方法

古代より続く集落を特定する方法として、角川日本地名大辞典³⁾から平安時代に成立した古代律令制における行政区画である国・郡・郷の名称を網羅した時点である和名類聚抄に記載されている地名を抽出した。また、抽出された記載地名をさらに角川日本地名大辞典の地名編で検索し、各郷名の説明文から現在における場所を特定した。この方法は早稲田大学建築史学研究室中谷礼仁らの研究グループが考案したものである。

2) 調査の実施

以上的方法で抽出された千葉県内の千年村89カ所すべてについて図上分析と現地調査を行った。具体的には、千葉県の一級水系及び二級水系の分水界を特定し、各河川の流域と千年村の位置関係を把握した。次いで、20万分の1の土地分類図⁴⁾を用いて千年村のマクロな地形分類を把握したうえで現地を調査し、確認された微細な地形の実態について、斎木の分類（図-1）⁵⁾に従って区分し、水系と地形立地の関係について分析した。

3. 結果

以上的方法にもとづき調査を行った結果、わかったこととして大きく以下の三点があげられる。

1) 水系に近接した千年村分布

千年村は河川や湖沼沿いに分布しており、水系に近接した地形立地という傾向が確認できる（図-2）。

2) 地形・地質の界面に位置する千年村分布

*千葉大学園芸学部緑地環境学科 **千葉大学大学院園芸学研究科

***千葉大学園芸学部緑地環境学科

****千葉大学大学院園芸学研究科

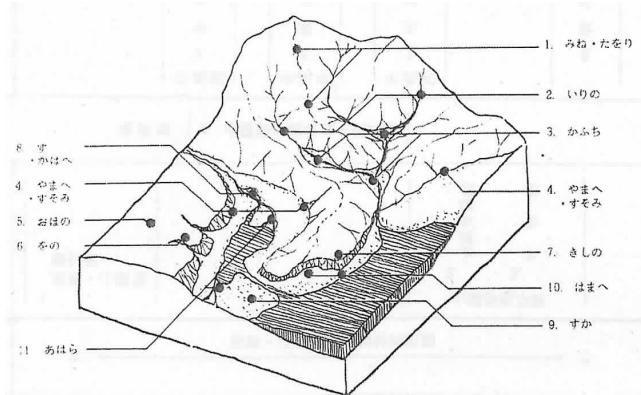


図-1 集落立地のブロック・ダイアグラム⁵⁾

山地・丘陵地と台地・段丘や低地との境界域、山麓部の扇状地や緩斜面または台地段丘崖端に形成された集落である「やまへ・すそみ」の分布が多く、沖積低地と洪積台地の界面に千年村の分布が集中している。また、この界面においては表層地質も異なっている。

3) 河川の流路延長と千年村分布数・地形立地との関係

河川の流路延長とその流域における千年村分布数及び地形の多様性には一定の相関が認められた。すなわち、流路延長が長くなるほど千年村の分布数が多く、地形立地も多様となる。同時に、流路延長が長いものほど下流部にまで千年村の分布が広がっており、地形立地の多様性も高いということがわかる。例えば内房・安房地域における小糸川・養老川での流路延長と千年村の分布数や、外房地域での栗山川の地形立地の多様性においてその傾

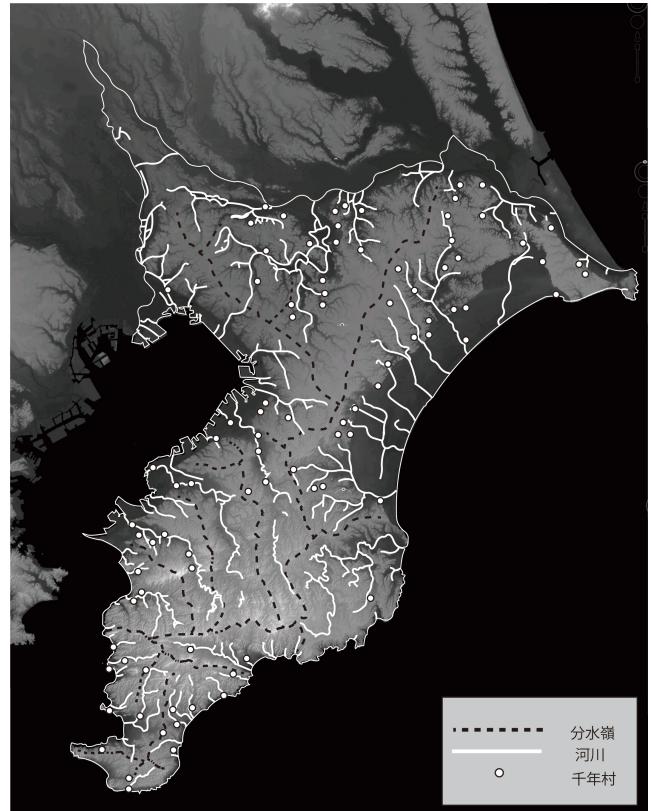


図-2 千葉県の水系と千年村の分布

表-1 千年村の地形立地と水系との関係 (外房地域の例)

流域名	支流	流路延長(km)	流域面積(km ²)	和名類聚抄 郷名	現在の地名	山地・丘陵地		台地・段丘				低地		境界域	
						尾根・山腹型緩斜面	山間谷底平野	中・高位面		低位面	微高地	人口地形			
						1.みね・たきり	2.いりの	3.かぶち	4.おほの	5.をの	6.きしの	7.す・かはへ	8.すか	9.はまへ	10.あはら
南白亜川	小中川	17.498	117	1.山辺郡高文郷	山武郡大網白里町大網										11.やまへ・すそみ
	赤目川			2.山辺郡草野郷	山武郡大網白里町萱野										○
				3.長柄郡柏原郷	茂原市本納										○
一宮川	阿久川	30.327	222	4.長柄郡兼陀郷	茂原市太田							○			
	一宮川			5.長柄郡刑部郷	長生郡長柄町刑部	○									
	三途川			6.長柄郡車持郷	長生郡長南町長南	○									○
	鶴枝川			7.埴生郡坂木郷	長生郡長南町坂本										
	一宮川			9.埴生郡埴生郷	長生郡一宮町一宮							○			
夷隅川	落合川	65.063	299	8.夷隅郡長狭郷	いすみ市上布施					○					
作田川		18.218	104	11.山辺郡菅屋郷	東金市家之子										○
木戸川		20.9	72	12.武射郡大蔵郷	山武市松尾町上大蔵		○								○
				13.武射郡新居郷	山武郡芝山町新井田										○
栗山川	高谷川	33.743	292	14.武射郡野郷	山武市松尾町猿尾					○					
				15.武射郡長倉郷	山武郡横芝光町長倉										○
				16.武射郡押熊郷	山武郡横芝光町下吹入	○									
				17.武射郡加毛郷	山武郡芝山町大里			○							
				18.匝瑳郡幡間郷	山武郡横芝光町原方							○			
新川	大利根	20.4	121	19.匝瑳郡石室郷	山武郡横芝光町小川台				○						
				21.匝瑳郡中村郷	香取郡多古町南中	○									
				22.匝瑳郡玉作郷	香取郡多古町南玉造	○									
				23.匝瑳郡田部郷	香取市西田部	○									
				20.匝瑳郡須賀郷	匝瑳市横須賀						○				
その他				24.海上郡神代郷	香取郡東庄町大久保										○
				25.海上郡石井郷	旭市岩井	○									
その他				10.山辺郡岡山郷	東金市東金										○
				26.海上郡横根郷	旭市横根										○

向が顕著である (表-1)

4. 考察

水系に近接する千年村の立地は一見すると水害に見舞われ、生存基盤という視点からは危険なように思われる。しかし同時に水は生存・生産基盤に欠かすことができないものである。そのため、千年村は水資源を得ることができる水系に近接して分布しているのではないかと考えられる。例えば養老川流域の旧海上郡島穴郷や栗山川流域の旧匝瑳郡幡間郷は河川の下流域に位置する千年村であるが、そのような場所に分布している千年村は自然堤防や砂州といった微高地部分に立地していた。従って、その地形立地により水害の被害を免れ今まで持続してきたのではないかと考えられる。

沖積低地と洪積台地の際部に千年村の分布が集中している要因としては、地質・地盤が安定しており、山地・丘陵地と台地・段丘や低地との境界域、山麓部の扇状地や緩斜面または台地段丘崖端では比較的水を得やすく生産にも適しているためではないかと考えられる。

短い河川ほど千年村の分布数が少なく中～上流部に分布している傾向がある要因としては、河川の堆積作用が小さいため地形立地の多様性が小さく生存・生産基盤の安全を確保しにくいため、生産基盤を支える水資源を得にくいためと考えられる。

例外として、夷隅川流域の夷隅郡長狭郷をあげることができる。夷隅川流域は延長距離が65.063kmと長いにも関わらず、分布している千年村は1つしかない。これは、夷隅川流域は断層地帯に位置しており地殻変動が激しいと考えられる地域であるため、生存・生産基盤の安全を確保しにくいためではないかと考えられる。

流路延長・流域面積の大きな河川は川の浸食・運搬・堆積作用も大きく地形立地の多様性が大きい。そのため多様な生存・生産

基盤と生活様式が生まれ、古くから集落が持続してきたのではないかと考えられる。

今回は20万分の1の土地分類図を用いて中地形で大きく分類し、さらに斎木の研究に照らし合わせて小地形で分類する方法をとった⁶⁾しかし、水系及び地形立地は今回扱ったものよりも大規模な平野、台地といった大地形や微地形、極微地形といった異なるスケールで考察することもできる。そのため、スケールの違いによる生存・生産基盤となる水系及び地形立地と集落の持続性との関連性についても調査・研究を進めていく必要があるだろう。また考察内容の裏付けをとっていくことが今後の課題となる。

補註・引用文献

- 1) 千年村の調査研究は、早稲田大学建築史研究室の中谷礼仁を中心に組織された研究グループにより、文化庁の助成研究「文化財の確実な継承と地域活性化活用のための防災指針の作成と普及」(座長:長谷見雄二)の一部として開始され、本研究も同助成を受けて実施した。東北地方の千年村の所在地同定とその存続条件に関する調査を端緒として、その後、筆者らの研究室も参加して千葉県内の千年村に関する同様の調査を行ってきた。現在、関西地方の研究者らの参加も仰ぎ、全国の千年村の所在地同定を開始したところである。詳しくは以下のウェブサイトを参照のこと。<http://rhenin.wordpress.com/2011/09/16/古凡村調査開始（文化財の確実な継承と地域活性化）>
- 2) 建築大辞典: 韶団社(1974) p.696.
- 3) 角川日本地名大辞典12: 角川書店(1984)
- 4) 土地分類図(地形分類図) 千葉県(1972) : 経済企画庁総合開発局(1972)
- 5) 斎木崇人(1986) : 農村集落の地形立地の条件と空間構成に関する研究
- 6) 日本応用地質学会(2000) : 山地の地形工学 p.7,8